

# 中村道子さん

名古屋市最高齢「認知予防リーダー」  
多彩な活動を通じて仲間を増やす

## なでしこ力



中村道子さん

昨今の報道で、民間よりはるかに女性差別が根強いと分かってきた国家公務員の世界。そんな中、昭和23年に大蔵省事務官試験に合格、翌年に任官され国税局で退職まで勤め上げたのが中村道子さん（91歳）だ。退職後はボランティア活動にまい進して30余年。現在は名古屋市最高齢で「認知症予防リーダー」の資格も取得し活動を続けている。

### 「女のくせに」と 言われ続けた国税局時代

「(国税局時代には) 周囲から“女のくせに”と何度もいわれました。昇給も昇進も(男性に比べて) かなり抑えられました。当時の国税局は労働組合が弱かったこともあるかもしれませんが。それでも仕事を辞めなかったのは、責任があったのと仕事がおもしろかったからでしょう」と話す中村さん。昭和3年、名古屋市千種区生まれで、旭丘高校卒業後、「女は働くものじゃない」という父親の反対を押し切って昭和23年に大蔵省の事務官試験を受験した。受験者100人のうち合格者は3人か4人で、女性は中村さんだけだった。「私は試験運が良いから」とあっさり話すが、当時としては快挙だったはずである。

昭和24年に任官され、岐阜でキャリアをスタートさせた。以来、転勤が16回。ことあるごとに枕詞のように「女のくせに」と言われ続けたが「退職する頃(昭和59年)にはやっと

働く女性が少しだけ認められるようになりました」と振り返る。退職までに同じ仕事(大蔵省事務官)の女性と会ったのはわずか4人。それほど試験合格も難しく、女性が働き続けるのが難しい職場だったことも分かる。

夫の仕事の関係で関東に転勤になった際、仕事を辞めるつもりだった。しかし「転勤した先の職場で知り合いができるから便利かもしれない。後に続く人のためにも、転勤後も働き続けるという前例を作った方が良いかもしれない」と仕事を続けた。40歳で、仕事に必要だと感じて税理士資格を取得、相続関係の部署に異動すると宅建資格も取得した。事務官という激務の仕事をしているが資格取得の勉強は容易ではなく、ほとんどの職員が資格取得をしなかった。そんな中、中村さんは電車の移動時間も試験勉強に充てて資格を取得、その後の仕事にも活かしている。

退職後はボランティア活動にまい進した。当時、政府の援助が受けられず一時帰国ができなかった中国残留婦人を受け入れるボランティ